

意見

神の言葉に直面するルター

佐藤 吉昭

16世紀の宗教改革者として、中世と近世の転換期に立つ信仰の巨人、M・ルターに、彼を敢えて「十字架のことば学者」と規定して、中世後期の論理学、とりわけオッカム主義の論理学的言語理解の視点から挑戦された清水氏の提題の後半に対して、ルターの言語の基本問題として積極的にそれを評価したい。同時に、この複合的人物の言語の問題の本質をそれによってどこまで絡め取ることができるのか、全容を理解する上でそこに生じるいくつかの疑点を付け加えさせていただきたい。

ルターにキリスト教信仰の再発見を見出すことへの抑制もしくは反動として、彼を中世との歴史的連続の中で相対的に捉え、すでに学習していた後期スコラ学の残滓を検証しようという試みは、歴史考証の基本に属するとはいえ、彼を歴史の人に矮小化してしまう。清水氏の取られた方法はそれとは根本的に異なる。過去のスコラ的「栄光の神学者」を否定する「十字架の神学者」としてのルターの逆説の構造を、再度オッカムの言語理解と対比、対照して検証するのである。氏は『キリスト者の自由』で、ことばが「世界を記述し、情報を伝えるという言語の機能とは異なる機能を言葉の核心にあることとして見る」ことがルターの主張であり、これは「神学者たちがことばをもっぱら事態を記述するものとして受け取り、神学的議論の材料として使っていることへの批判である」と冷静に断定する。聖書のことばは「読み手に対する神の語り掛け」であり、「いわば現れとしての書かれた言葉のうちに、語り手が隠れている」と理解することが、ルターが聖書に見出した「戒めと約束」の真意であると結論し、中世後期の論理学もこれらの認識に対して、すでに *conspectus* と呼ばれる場を与えていたことを証言する。

ただルターの言語観を初期ラテン語論争論文の分析で終始することには異議が挿まれるであろう。若干の問題を取り上げてみよう。

1. G・ビールに学んだオッカム流のノミナリズムから次第に遠退いて、アウグステイヌスに傾倒していく過程で、ルターはアウグステイヌスの言語観と再会していな

いのか。

2. 聖書釈義史とドイツ語学史の彼の業績。全聖書の原典からのドイツ語訳、特に旧約のヘブル語からのドイツ語訳は、印欧語と異質の言語体系をもつヘブル語の文法構造とそれのもつ独特な語感、言語心理学の差異を克服し、翻訳を通して彼が改めて原キリスト教理解の出発点に復帰していることを意味する。その間彼の言語心理学的展開はいかなるものであったのであろうか。たとえば、有賀鉄太郎が彼のハヤトロギア提唱の出発点として捉らえた出エジプト記 3:14 の 'ehyeh 'asher 'ehyeh の箇所をルターは Ich werde sein, der ich sein werde と訳し、70人訳とスコラに感わされ、Ich bin der Seiende と理解することがなかった。そこにはギリシア的存在論、ロゴスに支配されないイスラエルの神への接近と発見が見出される。その状況はマイモネデスなどの西欧のラテン訳と本質的に違っているはずである。

3. 「神の言葉」Wort Gottes をルターは改革者の誰よりも高めた。そこでのみ、神が absconditas から姿を明らかにし、人に手渡される神の啓示の様態 modus であり場所である。そのことばの中に神自身が現前する。verbum promissionis であり、唯一の神の恵みの乗り物 vehiculum gratiae dei である。こうした「神の言葉」をどのようにわれわれは理解したらよいのであろうか。

4. ゲルマン語で奔放に書かれた彼の神学著作、説教など、そして何よりも、ルター言葉、そして「神のことば」が新印刷技術を通して民衆に直接伝わった「言葉の大衆化」「印刷文化」は中世スコラとの決定的決別を前提として理解しなければならないであろう。

こうした諸問題は、スコラとのしがらみの存在にもかかわらず、ルターが近世人としてシンポジウムの設定枠「中世」を超え出て神学・思想世界に持込んだものというべきであろう。最後に、筆者自身、ルターと宗教改革の分野に対してまったくの門外漢であることを告白、弁明させて頂きたい。